様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年4月25日現在

機関番号： 32660
研究種目：基盤研究（C）
研究期間： 2009 ～ 2011
課題番号：21520282
研究課題名(和文)　舞台衣装からみるチューダー朝演劇　-衣装調達・演出と劇団の変遷-

研究課題名(英文)　Theatrical Costumes and Playing Companies in the Tudor Per

研究代表者
小林　酉子　(KOBAYASHI YUKO)
東京理科大学・理工学部・教授
研究者番号 60277283

研究成果の概要（和文）:チューダー朝初期に王侯貴族のお抱え劇団が誕生してからエリザベス時代に至って商業劇団が最盛期を迎えるまで､この間の演劇がどのような演出の下で､どのような衣装で演じられたかを明らかにした。宮廷饗宴を演じていた俳優たちが宮廷外でも演じるようになると，饗宴衣装が民間の商業劇場へ流れ，ロンドンの市井の劇場でも使用された可能性が高い。本研究では，チューダー朝期を通じての演劇の演出と衣装の変化を追って，英国ルネサンス盛期の商業劇場の舞台がどのような有様であったかを検証した。

研究成果の概要（英文）： In the Tudor period, garments for court masks were discarc of or given to the players after alteration and translation. Some of these garme could have gone into the store of a playing company in the latter half of the 16tl century. Sumptuous dresses, emphatic colors, and sensational stage performance were the features of pre-Shakespearean stage. Although characteristics of plays changed after 1594, costumes were still the most important visual aspect of production.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
総　計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：　人文学
科研費の分科・細目：　英米文学
キーワード：ルネサンス演劇 舞台衣装，チューダー朝

１．研究開始当初の背景

(1)　チューダー朝演劇において，上演時にどのような衣装が使用されていたかは不明な点が多い。本研究では，宮廷饗宴記録をもとに，これを解明しようとした。

(2)代表者は過去の研究において，エリザベス朝の商業劇団所有衣装を分析し，それらの殆どが中古で，貴族の払い下げと見られるものが多かったことを明らかにしたが，本研究では，その出所をさらに解明することを目指した。

２．研究の目的

本研究では､チューダー朝初期に遡って(1)劇作品上演の実態，(2)舞台衣装の調達とその後の流れを中心に，エリザベス時代末までの演劇と劇団の歴史を俯瞰することを目的としている。

(1)チューダー朝初期の宮廷では，宗教劇，道徳劇などの筋書きが固定したインタールードが演じられていた。その演出や衣装は，中世以来の伝統に則ったものであったといえる。ヘンリー8世は,自ら饗宴の演出や衣装を考案し､出演して楽しんだが，そのような王の下で，饗宴スタイルも変化していった。

エドワード6世，メアリー女王の時代を経て，定型化したインタールードから，自由な筋展開を持つ劇playが成立するまでに，宮廷饗宴で使用された衣装や饗宴自体の演出がどのように変化していったか，饗宴局の記録から分析する。

宮廷のお抱え俳優らはやがて宮廷の外へ出て，貴族の館や地方都市で上演するようになり，彼らがルネサンス演劇を生み出す母体となったが，そこに至るまでの演劇の軌跡を明示したい。

(2)宮廷饗宴衣装は､チューダー朝初期は王自らデザインに加わりもしたが，1540年代半ばに饗宴局が設置されると，この部局がマスクの演出，衣装デザイン，準備一切を執り行った。

饗宴衣装は数回の作り直しを経ると､処分，または祝儀として払い下げられた。

エリザベス女王の治下，1583年3月には女王の名を冠した劇団一座が誕生し，宮廷にお抱え俳優を置いて，宮廷饗宴での役を演じさせる形から､商業劇団を宮廷に呼び寄せて､劇を演じさせる形に変化していった。そのとき，饗宴で使用された衣装は祝儀，あるいは，不要品の払い下げの形で民間劇団の手に渡ったと考えられる。

1580年代から90年代にかけて成立した商業劇団は，次第に収益を上げ，常打ちの劇場で舞台衣装の数を増やしていった。そこでどのような舞台が見られたのか，本研究では，商業劇団の所有衣装や上演に係わる記録から，民間劇場での演劇の実態を解明し，チューダー朝期の演劇全体の流れをまとめることを目的とした。

３．研究の方法

(1)チューダー朝初期からエリザベス時代前半まで

チューダー朝初期に王侯貴族のお抱えとして劇団が生まれたが､当時の劇は､筋書きがほぼ定まり登場人物も美徳や悪徳の擬人化などで，後の時代の劇playとは区別して，インタールードと呼ばれる。本研究では，チューダー朝初期､ヘンリー7世，ヘンリー8世の宮廷饗宴の記録から､その演出と衣装の調達について分析を行ったが，The Privy Purse Expenses of Henry VIII、Accounts of the Great Wardrobeの他，特に宮廷饗宴記録を一次資料とした。

エドワード6世，メアリー女王時代，エリザベス時代には饗宴局が宮廷饗宴を統括する部局として活動し，会計簿が残されている。本研究ではこの会計簿を基礎資料として､饗宴の演出，衣装から上演の実態をまとめた。

饗宴衣装には王室衣装庫から取り寄せた豪華な布がふんだんに使用されたが，それらは数回の作り替えを経て､祝儀や現物支給の出演料の形で演者に下げ渡されてもいる。

これらの衣装が民間の商業劇団の手に渡った可能性は高く，文献資料・研究書によって検証を行った。

研究にはインタールード・テクスト，演劇関係書の他，王室会計記録，祝宴関係記録を利用した。染織関係資料，絵画資料などは，以下の施設で実地調査・収集を行った。

ビクトリア＆アルバート博物館，ギルドホール図書館，ロンドン博物館，シェイクスピア・インスティテュート，大英図書館，英国公文書館

（２）エリザベス時代後半

商業演劇が生まれた1580年代以降，ロンドンでは､マーロウやグリーンなど､大学卒の作家たちが人気を集めたが，1590年代になると､シェイクスピアが現れ，大時代的な芝居から性格劇へと演劇が変化していった。この時，舞台衣装はどう変わったのか。どのように調達されたのか。作品テクスト，エリザベス朝演劇・服飾史資料を用いて､これらの点を検証した。

1580年代からエリザベス朝末まで，劇団は離合集散を繰り返しながら､劇場閉鎖，巡業，宮廷公演などを経験した。劇団を取り巻く環境と舞台衣装の調達，売却は密に関連しており，これらの点を明らかにしながら，演劇の流れを追った。

1580年代以降､ロンドンに相次いで建設された民間の商業劇場では，劇団手持ち衣装の中に，少なからず，宮廷饗宴衣装が含まれていたと考えられる。

本研究では､劇場ローズ座の劇場主であったヘンズロウの『日記』をもとに，商業劇団で使用された衣装を分析，検証し，英国の盛期ルネサンス演劇が実際にどのような衣装で上演されていたのか，その復元を行った。

研究には作品テクスト，演劇関係資料の他､以下の文献を利用した。

衣服の仕立て・染織に関する文献，英国経済・輸出入品・羊毛産業に関する書籍，俳優・貴族の遺言書・資産リスト，舞台衣装に関する裁判記録

４．研究成果

思われる。翌年，ハンガリー風コートは

(1)チューダー朝初期の宮廷饗宴は、ペジェントと呼ばれる大型山車に演者が乗り込んで，広間に登場し，貴婦人を救出したり、野人と闘うなどの芝居仕立てであった。ヘンリー8世は演者として登場し，演出や衣装デザインにも進んで参画して，自らも積極的に関わっていた。当時の外交は饗宴の合間に行われるといえるほど,饗宴の担う役割は大きく，衣装や演出には王と国家の威信をかけて、莫大な費用が費やされた。衣装は特別にデザインされ仕立てられたが，1520年代後半からは,作り替えによる再利用が盛んに行われるようになり，ヘンリー8世自身も作り替えた衣装を着て、マスクに出演した。

(2)ヘンリー7世，ヘンリー8世は饗宴の立案に加わり、他国との政治折衝を意図した宮廷饗宴を執り行ったが，少年王エドワード6世の時代には、重臣が饗宴を計画立案し、王を楽しませるだけの饗宴に変化した。英国の宮廷饗宴史上，エドワード代のみに行われたものがLord of Misrule である。これはいわば愚者王で，王侯のロンドン入市式を模したパロディ等，一連の滑稽な祝宴が巨費をかけて行われた。
ロンドン入市では，Lord of Misruleは重臣や近衛隊，銃列隊の他に，世継ぎを従えていたが，饗宴局記録には，子供たちはfoolと記されている。子供たちは多色のロングコートを着用していたが広義の演劇といえるこの入市式での衣装は，舞台での道化衣装と捉えることができる。Lord of Misruleのパレードは、演劇舞台で各演者がどのように装っていたかを解明する手がかりとなった。

(3)即位後，スペインのフェリペ2世と結婚したメアリー女王の時代は，経済性を重視した比較的地味な饗宴が続いた。饗宴費用の中心は衣装代であったが，メアリーは前代の在庫を積極的に使用し、経費節減を図った。エドワード時代のマスク衣装に別布を縫い付けたり、被り物を取り替えたりする等の方法で作り替えられたことが，饗宴局記録から明らかになった。このような作り替えはエリザベス時代にも踏襲されたが，16世紀後半の商業劇場でも同様に行われた可能性が高い。

(4)エリザベス女王は即位当初，派手なマスクを催したが、衣装の作り替えはエリザベス時代にも盛んに行われた。饗宴局の記録によると，1年から5年ほどの期間で、2回から4回の作り替えが実施されている。例えば，1554年のメアリー代，「船乗りのマスク」で誂えられた紫金襴地の船乗り用ジャーキンは，5年後，エリザベス代になって「ハンガリー人のマスク」用コートに転用された。ハンガリー人のコートは、ブレード付きボタンが特徴で，船乗りのジャーキン前面にブレードを付けることで、全体の形は変えずに転用されたと

「ダイアナとニンフのマスク」のために，女性演者たちのカートル(スカート) に作り替えられている。数回の作り替えを経た衣装は、処分の対象とされたが，祝儀の形で俳優に下賜されたり，現物給 形で下級役人に下げ渡されてもいる。このような衣装が，1580年代以降，ロンドン郊外に次々と建設された商業劇団の劇場にストックされていった可能性が高い。

(5)エリザベス朝後半になると，宮廷で行われるマスクの数は減少し、代わって民間劇団を宮廷に呼び寄せて劇を演じさせる回数が増していった。劇団はロンドン郊外に常設小屋を持ち，宮廷公演も行う中で、収益を上げ，手持ち衣装も増加していった。1580年代後半から1590年代前半の芝居は，マーロウの作品『タンバレン大王』『フォースタス博士』に代表されるように，大時代的で、派手な演出と豪華な衣装が特徴である。『フォースタス博士』は伝統的な仮面劇の様式が取り入れられた最後期の芝居である。善悪の天使，ベルゼベブ，美徳が擬人化された姿で登場する中世的な劇の人物の衣装には，伝統的な色，素材，模様が取り入れられている。

本研究では，上演時の衣装・演出が比較的具体的に再現可能な劇作品をもとに，当時の舞台の視覚化を行った。

(6) 1590年代前半は，商業劇団の草創期に当たり，離合集散しながら，巡業や疫病流行による劇場閉鎖，宮廷公演などを経て，次第に経済的に安定し，俳優の地位も向上していった。ローズ座の劇場主ヘンズロウの『日記』は，このような状況にあった海軍大臣一座の貴重な記録である。

その『日記』から衣装に関する記録を抽出し，舞台衣装の実際の姿をまとめた。

(7)上記の一連の研究により，チューダー朝初期からエリザベス期までの宮廷饗宴衣装の具体像と作り替えの方法を明らかにした。

また，宮廷衣装が民間劇団へ流れ，商業劇での豪華な衣装による上演という英国ルネサンス演劇の大きな特徴を形作ったことを検証した。

(8)チューダー朝に当たる15世紀末から16世紀は大航海時代と呼ばれた。ヨーロッパから東洋をつなぐ地中海を通らないルートが開かれたことによって，直接，商品の取引が行われるようになったが，当時の主要商品は洋の東西を問わず，織物であった。

演劇衣装の研究により、ローズ座の舞台衣装として使用された布の中に、インド産キャラコが含まれていることを発見した。キャラコはまた，

Reigns of Henry VII and Henry VIII
—Theatrical Costumes and Pageants—
Journal of the International Association

エリザベス女王のカートルにも仕立てられていた。この布が東洋からもたらされ，ロンドンの商業劇団の衣装室に収まるまでの道筋を検討し，日本では南蛮貿易といわれた東西貿易で取引された織物と流通の流れを論証した。

(9)これまで，宮廷饗宴の演出を衣装の面から再現した研究は国内外ともになく、国内・国際学会で、本研究の成果を発表したことにより，ルネサンス演劇衣装・演出の具体像についての研究がさらに進むことが期待できる。国内では，本研究成果の発表後，ブルゴーニュ公国宮廷での饗宴衣装についての論文が発表され(服飾文化学会誌)15-17世紀ヨーロッパの宮廷饗宴の演出，衣装研究に関して，本研究成果がインセンティブを与えたといえる。

1580年代以降の商業劇場の演出・衣装に大きく影響したものには，宮廷饗宴の他に，君主の巡幸パレードやロンドン市長就任式などの民間祝典パレードがある。平成24-27年度は「英国ルネサンス期ペジェントリーと商業劇団の興隆―劇場舞台の衣装・演出への影響―」(基盤研究(C)) によってルネサンス期英国演劇における演出・衣装の実態解明へ向けて研究を続ける。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計6件）

①小林酉子、南蛮文化・舶載織物の浸透と影響(2)―オランダと英国の織物交易―、東京理科大学紀要(教養篇)，査読有、44号，2012，139-156

②小林酉子，南蛮文化・舶載織物の浸透と影響(1)，東京理科大学紀要(教養篇)，査読有，43号，2011，71-88

③小林酉子，チューダー朝初期の宮廷饗宴―その演出と衣装―、国際服飾学会誌，査読有、38号，2010，1-14

④Yuko Kobayashi, Court Revels in the of Costume, 査読有，Vol.38,2010, 15-20

⑤小林酉子，エリザベス朝前・中期の演劇と舞台衣装，服飾文化学会誌(論文篇)，査読有，Vol.10, No.1, 2010, 93-105

⑥小林酉子，文献から読み解く南蛮屏風―舶載の布と日本での需要―、国際服飾学会会報，査読なし，51号，2009, ４

〔学会発表〕（計2件）

①Yuko Kobayashi, Alteration of Garments for Court Revels in the Early Elizabethan Period, Renaissance Society of America, 2012.3.24. Grand Hyatt Washington, Washington, D.C.
https://rsa.site-ym.com/

②Yuko Kobayashi, Court Revels in the Reigns of Henry VII and Henry VIII―Theatrical Costumes and Pageants―, The International Costume Congress, 2010.8.25, National Museum of Korea

〔その他〕
ホームページ等
http://www.tus.ac.jp/ridai/doc/ji/RIJIA01.php

６．研究組織
(1)研究代表者
小林　酉子 (KOBAYASHI YUKO)
東京理科大学・理工学部・教授
研究者番号 60277283

(2)研究分担者　なし

研究者番号：

(3)連携研究者　なし

研究者番号：